

## 《題目》採用氷河期を謳歌する学生諸君へ

私が大学を卒業したのは、昭和 52 年 3 月。あの [オイルショック] が昭和 50 年に起き、突然就職氷河期が始まった時です。地方とはいえ国立大学であり、オイルショック前までの先輩達が、楽に入社できていた会社に訪問しても、非常に横柄な言い方で『まあ、極めて優秀であれば採用してやっても良いけど、信大では難しいよ』と言われたことを覚えています。別の会社では、「会社説明会を行う」とのことで、当日、その会社に行くと、受付でいきなり番号札を渡されました。その説明会には 2500 人位が参加しておりました。1 時間程待たされ、人事部の人が現れ、説明会への参加へのお礼を述べた後、いきなり問題集（性格試験？能率試験？）が配られました。試験終了後、2 時間程待たされ、再び人事の人が現れ、200 人程度の番号が呼ばれ、その後で言われたことは、『ただ今、番号が呼ばれなかった人は、どんなに優秀な大学を出ていても、成績がどんなに優れていても、また、議員さんなどのコネを使っても、当社に入社できる可能性は 99.99%ありません。そんなことをしている暇があったら、他社を受けた方が良くと思います。以上です。番号が呼ばれなかった人は、直ちにお帰り下さい』これで終わりです。同様の事が、多数の会社で経験しました。幸運にも、私は就職浪人することなく、ブリストル・マイヤーズに入社しましたが、あの時の会社訪問や説明会での出来事は、今も忘れていません。

その後 6~7 年してバブルがやってきて、採用氷河期となりました。聞いた話ですが、多くの企業で、内定を出した学生が他社に行かないように、入社前に、旅行につれて行ったり、車を無償で学生に与えたり、あの手この手で、引き留めに躍起になっていました。同じように勉強し、同じ大学を出て、何故、社会状況の影響を、ここまで極端な形で、受けなければならないのか？若いころは、その理不尽さに怒りも感じていました。

このように、就職氷河期に運よく外資系製薬メーカーに入社した経験と、その後に訪れたバブル期に入社してきた社員たちを見ると、もちろん個人差はあるとしても、就職氷河期に入社した社員の方とバブル期に入社してきた社員では、明らかに差があります。それは、仕事に対する姿勢の問題です。バブル期に入社した社員たちは、嫌いな仕事やつらい仕事をするとき、『やりたくない』とか『それ、僕がやるのですか？』と平然と聞いてきたり、言葉には出さなくても、明らかに顔に出したりしていました。私が知る限り、就職氷河期に会社に入った人たちには、そのような態度を見たことがありません。

このように書くと、就職氷河期世代とバブル期の世代間との差ではないか？と考える人もいるでしょう。私は、そうは思いません。我々、就職氷河期の世代は、例えば、入社面接でいえば、本で読んだような表面上の仕事観や、その職種を希望する理由、その会社を希望する理由などを言っても、面接官の人には、全く説得力が無く、『どの本で読んできたの？』と言われたこともありました。しかし、バブル期や今年のような採用氷河期の採用面接においては、会社の人事部は、各部門が希望する人数を確保することが最優先であり、極端な言い方をすれば『学生の機嫌とりが最も重要』なのです。逆に、我々、就職氷河期

の学生は、嫌でも、『自分の生涯を捧げる仕事とは何か?』や『入社できた際には頑張ろう』と、【就職氷河期と言う時代が考えさせてくれた】のです。逆に言えば、バブル期に楽に就職できた場合は、『そのような面倒なことは考えなくて良い』のです。すなわち、決して、就職氷河期の我々が優れて、バブル期の学生が劣るわけではないのです。然しながら、入社後の教育・直属の管理職の影響なども重要ですが、上記のような入社前の環境が、生涯に渡る仕事に対する姿勢や考え方に大きく影響する。これは、私の管理職として実感であり、事実です。

最後に一言、バブル期や、現在のような採用氷河期に就職する人達に忠告させて下さい。『将来、あなたが就職した会社の経営が下降線を辿った時、真っ先にリストラされるのは、あなた達ですよ。学生時代は、お金を支払って教えてもらっていたお客様です。就職し、仕事をする時は、お金（給料）を貰って働くのです。辛い仕事、嫌な仕事をするから、お金を貰えるのです。失敗すれば、叱られ怒鳴られるから、給料を貰えるのです。このことを忘れないでください。